
昔中二病、今魔法使い

ふうた

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

昔中二病、今魔法使い

【Nコード】

N8638Y

【作者名】

ふうた

【あらすじ】

平々凡々のサラリーマン高尾和利28歳。彼は唐突に現れた男に異世界に飛ばされる。曰く「【役目】を果たしてほしい」んだとかなんだとか。……えーと。あと、何だかこの世界、むやみやたらに、見覚えがあるような、そうでないような……って！！おい！止める！その呪文の詠唱を止めるーーーー！！

かつて、自身が作り出した詠唱呪文が闊歩する異世界。果たして、中二病を卒業して久しいカズトシの精神は碎け散らずにいられるのか。いざ、開演。

物語の始まり

首筋には冷たい感触。

薄く、ごくごく浅くではあるけれど、薄皮を切り裂いて身体に侵入した冷たい熱を感じる。

不快感と違和感と、本能が告げる警鐘に高尾和利は呻いた。

「だ、れだよ……お前」

冷や汗が全身に浮き出る中、和利が震えながらも見上げる先には一人の男性。

初老だろうか、黒髪に白髪が混じり始めた男が酷く醒めた瞳で和利を見下ろしていた。

「……」

男は無言だった。消し忘れたパソコンが照らす室内、黒い服を纏った病的に白い男の姿。そのしわがれた細くしなやかな指が握る何かがわずかに動けば己の首は掻き切られる。

起き抜けにそんな非常事態に晒された和利はどれだけの時間を使って、その情報を認識、咀嚼し、先の問いを吐き出したのか。

生存本能だけが極限に肥大する今現在、時間などを気にする余裕はなかったが、どうやら目の前の存在はその問いが気に入らなかつたらしく、細い眉を僅かに顰めた。

「迎えに来たんですね」

「……は？」

「しかししかして、がっかりです」

眉を顰めた、それだけの感情の変化を見せただけで男は淡々と溜息を吐き出し、唾棄するように和利を嘆いた。

勝手に自分の部屋に不法侵入し、あまつさえ命を奪おうとしているのに勝手に落胆する姿に和利は軽い怒りを覚えた。勝手に迎えに来て、勝手に落ち込むんじゃない、とは胸中の中だけの言である。流石に命の手綱を握られている相手に、そんな事をのたまえる程の精神や胆力はない。何せ普通の高校を出て、普通の大学を出て、中小企業に勤めるだけのサラリーマンである。喧嘩に明け暮れる事もなく、ヤクザな道を踏んでいる訳でもない小市民は鳴りそうになる歯や、震えそうな身体を抑えているだけでも大した物なのかもしれない。

しかしながら和利よりも一回りは生きているだろう彼はそんな和利の様子を意に介した様子もなく「まあ連れてかない訳にいかないし」「……やはりもう」と呟き、もといばやきながら何やら、虚空に光る指先を躍らせていく。

その間も首に宛がわれた刃は微塵も揺らぐ、ただただ描き出す文字に記号が作り出す。まるで漫画やアニメで見えるような魔法陣。薄青くぼんやりと光るそれを見て、その光がやがて自分と少女を包み始めえる段になり、和利は叫んだ。

「ちょ、な！ 何か、待て！」

「断ります」

自分の身体感覚が段々と希薄に、鈍くなっている。ベッドに触れているシーツの感覚や、何より首を斬ろうとしている刃の感覚もなくなっていく事に慄いた叫びは、けれどただ一言を以って却下された。

直後。

二人の姿は消え去り。

起動するパソコンを残して、片田舎のアパートの一室は無人となる。

生活の匂いをそのまま残した一室に住む平凡なサラリーマンの失踪は、大して話題になる事もなく、大家さんの月の収入を減らした位であった。

第一話

遠くで低く唸る獣の声。

流れる風は草と土の匂いをふんだんにまとうて鼻腔を擦る。

聴覚に嗅覚、更に頬を流れる風になびく草の穂先にちくちくと触覚も刺激され、和利の意識は緩やかに浮上していく

「ん……んあ!？」

そうして瞼を開いて、僅かの時間を思考の再開に費やし、驚愕した。

視界一杯に広がる広大な平原。

例えるなら——これは和利のイメージでしかないが——モンゴルのような地平線の向こうまで広がるような大平原。

「ど、こだよ此所……っ、は!」

そして通常運転に移行する頭は、この異常事態の寸前の記憶を蘇らせる。

慌てて掻ききられたはずの首に手をやれば、そこは何の傷跡もなく、傷もなく、ただ無精ひげが薄く生え始めた自分の肌があるばかりだった。

「な、んで」和利は混乱する。アレが夢であったとは思えない。それ程にリアルに現実的に、刃が己の皮膚を裂き、肉を千切って行く記憶。夢や妄想であれ程生々しく思い描ける筈がない、しかし現実には首は無事、けれどまるで覚えのない平原に放り出されている。果然と、上体を起こした状態で座り込む和利はある意味正常な反応な

のかもしれない。

人とは予想外の出来事にはおうおうとして弱いものであるのだから。

「……嘆かわしい」

だから、その溜息は人なる身の和利の声ではなく

「お、お前！」

「どうも、高尾和利殿。ああ、そう警戒しないで頂きたい。現状、貴方に危害を加える気はありませんので」

「……それを信用して、そうですね、とか言う奴がいると思います？」

唐突に、降って湧いた声に影。慌てて頭上を振り仰いだ和利の目に飛び込むのは全身黒一色の洋服を纏う男。

己の首を、無感動に切り裂いた男。

「はっは、確かに確かに。無理もない。寝起きに首を掻き斬られましたからなあ」

「他人事のように」

宙に浮かぶ男はジト目で見上げる和利の視線を受けて至極楽しげに笑みを浮かべる。

「まあ、まともな問答が出来るなんて思っちゃいけないけどさ。で、此所は何処だよ」

「さて？ 和利殿は何処かと思われませんか」

「そんな勿体振らないでも、俺の世界じゃないのは分かってるよ」

「……………」

和利の問いに、男の笑みが凍る。にやけた笑みを常に浮かべていた男から一本取った手応えに胸の溜飲を下げながら軽く肩をすくめる。実際はカマをかけただけに過ぎないのだが。胸の中でだけ「マジかよ!」と頭を抱えて嘆く自分を表に出さぬように、唇を薄く釣り上げて和利は笑う。

「驚くような事かよ。起きたら見た事もない場所に居て、空を飛ぶ訳の分からない男がいて。そもそもそいつに首を刈られた筈なのに、何ともない。思い浮かぶ可能性なんて、俺がイカレたか、お前に何かされたかだ。で、出来れば精神に異常を来していない方が望ましい俺にとって、選べる答えなんて一つだろ……実際否定されないと予想以上にダメージだけだな」

「さすがさすが和利殿。理解が早い。未だ、その才の残滓程度はこびりついていらっしやるようだ」

「そういうキャラ、二次元だけで間に合ってたんだけどな。……一応聞くけど。元の世界に帰るにはどうしたらいい?」

「【役目】を果たして頂ければ、直ちに」

「……けど、【役目】とやらは自分で見つけろって流れ?」

然り、と頷く男に、はあと顔を手で覆いかぶりを振る。

そうして決意するように唇を引き結ぶと挑むように鋭い瞳で見上げる和利と、それに相も変わらず泰然と微笑む黒一色の男。

初老の域に差し掛かったように見える男がどうやらそれ以上の情報を伝える気がないと知ると、肩を外国人がするように大仰にすくめてみせた。

「せめて金か武器。それと最寄りの町か村の情報くらいはくれるんだろっな?」

「勿論。いやはや、話が早くて助かりますよカズトシ殿。果たして

どう説得したものの、貴方が目覚めるまで正直途方にくれておりましてな。っと、まあこの辺りで。どうやら魔物が人の匂いを嗅ぎつけてきたようです。町の情報は彼らを打倒した後にでも」

当初から嘆いていた男は僅かながらも機嫌を良好に転じさせたらしく、弾むような、道化のような口振りで口上を述べ。それと共に大げさに動いていた指先はどうやら魔法陣を描いていたらしく、魔物の出現を告げると共に虚空から一本の剣を取り出し、カズトシに投げ落とす。

「……っと。あー…しかしマジかよ。俺、剣なんて握った事ないぞ…って、あれ？ 何だこれ」

「ああ、前の世界での衣服はここでは、ちと目立ちますので。事後承諾ではありますが、着替えて頂きました」

ずっしりと重みを伝えてくる剣を受け取る、そこで初めて気付いたのだが、着ている服が変わっていた。寝間着用のくたくたになったスウェットだったはずが、いつの間にか黒の着物と袴姿になっていたのだ。装飾に他の色や柄を用いている様子もない、黒一色という姿に自然と頭の上に浮かぶ男を思い浮かべ、どこの中二病だと痛々しさに顔を顰める。

「背中に変な文字とか入ってないだろうな」

「やあそういう方法がありましたか、闇とでも入れておけば良かったですな」

とは言えまさか裸になる訳にもいかず、腰帯の部分に括り付けられていた革紐に鞘をくぐらせ視線を巡らせる。右から左、視線を流していく中、背の低い草ばかりの中で比較的長い、カズトシの腰くらいまである草むらの奥、光る緑の瞳を発見した。

「ッ！……くっそ、考える時間もなしか」

「ちなみにそこに隠れておるシルバードッグは、まあ下の中といった力です。カズトシ殿の世界で言えば少し気性の荒い猛犬の牙と爪を鋭くして、肉体が少しばかり頑強に俊敏になつた程度の雑魚ですな」

「生きて帰す気無いだろッ！？」

視線を片時も草むらから離さぬまま、とても楽しげに草むらに潜む魔物の正体を暴露する男にカズトシは結構本気で魂の叫びを漏らす。

「普通の平凡な一般市民だぞちとら、喰われるわ！」

「いやしかし、本来ならここはレッドドラゴンとやり合う場面なのですよ？」

「アホかああああッ！」

そんな漫才もどきを果たして挑発と捉えたのか、詳細は分からないながら苛立つたような唸り声と共に一匹の——外見だけは犬に似た——獣が飛び出してくる。

「でかつ！？」

姿勢を低く駆けるその獣、身構えながらもカズトシはその大きさに目を見開く。

でかい。

駆ける犬は犬のくせに、カズトシ自身と同じ高さと思われた。現実世界では規格外的大型犬が涎を撒き散らし、餌と見定めて瞳を爛々とさせて駆け寄ってくる姿に、完全に気圧される。

「いやいや待てっ！」

現実には己の死を身近に感じる。剣を抜く事も忘れ、全知覚を回避に没入。

大きく開いた顎、涎と雑菌にまみれた牙が振るわれるのをみつともなくバレーボールの回転レシーブよろしく避ける。

体勢を整えるのと、犬が急制動を掛けこちらに向き直るのがほぼ同時。

「ああくそ」と何かに毒突きながらカズトシは剣を抜く。自分の命が掛かっている時に、他の命を奪う事に罪悪感や躊躇を覚えない程度に人でなしらしい自分に安堵しながら、高校時代に体育の授業で数時間行った剣道の経験を思い返す。正眼の構え。最もポピュラーな、というかそれしか知らない剣道の構えを取ると、荒く、弾んだ呼吸を落ち着けようと意識して深く呼吸する。

「——行くッ」

そうして駆け出したのは計ったように獣と同時。カズトシは剣を振り上げ、獣は顎を大きく開き飛びかかり――。

「え？」

加速のついた獣に簡単に懷に潜り込まれたカズトシは容易くのし掛かられて、押し倒される。あまりに呆気ない勝負の決着。

呆然とした頭よりも先に肉体が、生存本能に突き動かされた両腕が半ば無意識に、喉笛を噛み切ろうとする犬の口上下を押さえさせる。

「自分と同等の体格の獣を相手に正面からぶつかりあったらそりゃそうなるでしょうなあ……」

「呆れ、るのも、何でも、いつ、から！ たすつ、ける！」

「私、介入は禁止されていますので」

「うんっ！ なんと、なくっ……………そお、だつて…思ってたよ、畜生ッ」

ギリギリと自分の命をチップにした鬨ぎ合い、徐々に、徐々にではあるけれど獣の牙が迫ってくる。涎が顔に垂れ落ちてくる不快感も忘れ、回転し始める頭はこの状況からの打開策を探ろうと嘗て無いほどに激しく思考する。

空に浮かぶ男の手助けはないらしい。

手に持っていた剣はのし掛かられた衝撃でどこか遠くに飛ばした感触があり、実際首を左右に振った先には見当たらない。

この均衡はそう長くは持たない。主に、カズトシの筋持久力的にやばい。やばいやばいやばい。頭の中では走馬燈が巡り始めた。自分の人生から有効な対処法を探し出すという説を思い出すが、この状況から逆転する経験なぞ平凡な自分の人生で体験している訳がない。

「はあ……………あー、カズトシ殿。秘密にしておいて下さいな。一つ、魔法を教えましょう」

「……ッ！ は、やく……………！」

「く爆ぜよ爆ぜろよ炎の精。古の盟約に基づき、我が前に立ち塞がりし敵を討て」。はい、どうぞ

「そ、れ……………はッ……ぐ、う……………く爆ぜよ爆ぜろよ炎の精。古の盟約に基づき、我が前に立ち塞がりし敵を討てッ！>」

瞬間。

目の前の獣が爆散する。

内側から膨張する空気と体内の水分に破裂する肉体。

ぼたぼたと降り懸かる肉片や脳漿、そして爆ぜ切らなかった眼球

がぼとりとカズトシの頬に落ちて。

「う、おっぐえええええええ」

カズトシの初めての命をかけた戦闘は、血と臓腑と嘔吐物にまみれて終結した。

第二話

臓物と血にまみれて、更に自分の嘔吐物の臭いが更にカズトシに不快を感じさせる。嘔吐き、食道が胃酸に灼ける感覚に咳き込んでいると、唐突に己の全身を水の球体が包み、四つん這いになっていたカズトシの身体をはね除けた。

「うわっぶ！」

何が起こった、と混乱する頭を冷静に戻したのは、先ほどから宙に浮いていた男の声。くつくつと笑い声を囁み殺そうとして失敗している男を、半眼でカズトシは見上げる。

「ちょ、いきなり何すんだよ」

「いや、臭い物で。私、意外と潔癖症なんですよ」
「知るかッ！」

わざとらしくハンカチを出して鼻を押さえる男。

「お前さ、前々から思ってたけど事前に告知するとか何かそういう精神は無いわけ？ いつもいつもいきなりやりやがって」

「ないですな」

そんな抗議も右から左に受け流す男の姿に、盛大に溜息を吐き出す。すると吸い込む空気に血の臭気がない事に気付き、己の手元や身体を確認する。赤黒い液体と肉塊にまみれていた身体が綺麗さっぱりしている事に気付くと、「おお」と驚きの声を漏らす。

「ああ、でもすっかりしたけど。言いたかないが、サンキュ」

まあ、その余波で髪から胴着から袴までびしょ濡れになっている訳だが、その程度は許容範囲だろう。嗅ぎ慣れない濃密な臭気から逃れた事に安堵。僅かばかりの葛藤の後、礼を告げるカズトシに男は「お気になさらず」と肩をすくめた。

「あー。で。おかげで助かった訳でわざわざ言うのもアレだけど、介入とやらして良かったのか？」

「ああ、アレはまあ嘘ではないですがそんな雁字搦めでもありませんので。正史でもここは私が助力に入る筈ですから」

「……………あー。何かすげえ嫌な記憶を思い出すんだよなさつきから」

びしょ濡れになっていた筈の胴着が目に見えて乾き始めるのを尻目に、先の戦闘を結果的に引つ繰り返した魔法の存在を思い出す。

介入しないと告げていた相手のあからさまな介入に怪訝を示すも飄々と受け流す男の言葉に、カズトシは更に眉間の皺を深くした。思い当たる節があるのだ。

世界への転生方法、己にまわりつく助言する存在、本来現れる筈だったらしいレッドドラゴンとではなかったものの魔物とのいきなりの戦闘、更に男が告げた魔法の詠唱。

最後を除けば、ある意味ありふれた物語。ただ、最後だけが引つかかる。その詠唱は、男に言われる前からカズトシは、『知っていた』。

ゲームや漫画を忘れ、心血注いで体系立てて作り上げた魔術理論も、様々な属性を作り出した魔法の内容も、詠唱する言葉もそのほとんども今はもう忘れてしまったけれど。

確認しなくてはならない。何と言っても、【役目】とやらを果たさねばこの見知らぬ——と言っているのか——世界でただ一人となってしまうのだから。

「お前、これから正史で起こる未来、分かるのか？」

「申し上げられません」

「ああ、そっか……うん。そういう【役目】に関して直接的な答えを教えるのは多分無理、にした気がする」

カズトシの予想が当たっているのなら、この場の男の役割は助言者だ。何も知らぬカズトシに最低限の知識を告げる役割を負っている筈だ。であるなら、と質問の目先を変える。

「今、これから俺が置かれるであろう状況を口にする。この国の状況を鑑みて、有り得ない話があれば教えてくれ」

「なるほど。ええ、よろしいですよ」

含みのある笑みで笑う男を視界の端に、カズトシは思考に耽る。記憶を蘇らせながら、静かに口を開いた。

「今、魔力感知だか魔物の気配を察知してただか分からんが、ともかくこの場に騎士団が急行している」

是。

「それで、ドラゴンを……まあこの場合はただのデカイ犬だけど、魔物を倒したって事が知られて、町に連れられていく」

是。

「ああ、ちなみに先程のカズトシ殿が犬と呼ばわる魔物ですが、実力的に下の中とは言いましたが、下の下で武装した一般成人男性が辛うじて勝てると思われるクラスですから。今のカズトシ殿であれば十二分に騎士団のメンバーを驚かせるでしょう」

補足する男の声に、頷きを返す。その顔は渋く、難しい。

「……いや、まあここまではまだテンプレなんだけどな。なあ……
…その、騎士団の中に、一人最年少の女性騎士がいて。名前、シオリだったらしい？」

是。

顔を覆うカズトシ。

呻く。

「マジかよ……痛々しいなんてレベルじゃねえぞ」

どれもこれも。

『知っている』。

記憶の片隅、埃を被った過去の中。小学校高学年の頃から中学の途中まで、つたない文章力と貧しい語彙、それでもただ懸命に面白くしようと、当時の全てを注ぎ込んだ物語。その設定に、今の状況は酷似している。

「ちなみにシオリ様は正史ですとカズトシ様の第一の恋人となられるお方ですな」

「やかましい」

忘却とほぼ同義の場所から、何とか記憶を引き出そうと己の海馬をフル稼働させていた折に降り懸かってきた声に、カズトシは顔を盛大に顰めた。

「……嫌な事思い出させるなよ」

初恋の女子の名前。

今から考えると随分危うい行為だ。好きな子とせめて自分の物語の中だけでも一緒にいたいなんて。鳥肌が立つ心地に、身体を震わせていると、もう一つ、慄然とする事実に思い至った。

「なあ、一応聞くけどさ。シオリって……何歳よ？」

「シュバイルツ家の長子、今年15歳の誕生日を迎えられるとか」

「て事は、まだ誕生日は迎えて、ない？」

「ないですなー」

「14……」

顔を覆うだけでは足りず、がくりと膝を折る。

この物語、己が書いた内容が正史となるらしい世界観において、恋人に設定したらしい女騎士。という事はつまり、精神はそのままに連れて来られた自分は、中学生な頃合いの娘さんと恋愛関係にならねばならぬのか。「うああああ」これからの未来を想像し、呻くカズトシ。確かに当時を振り返り、小学生な自分に、14歳と言ったら寧ろお姉さんだったのかも知れないが。

そしてごろごろその場で悶え転がりたいのをどうにか心の中だけで収めているウチに、もう一つ、更に思い付いた疑問。

「あ、待て。俺、今何歳くらいに見える訳だ？」

ヒロインが当時のままであるならば、主人公は。

「そうですね、正史では13歳くらいですし、見た目にもその程度に若返っているように見受けられますが？」

その答えに、目を見開く。手元に視線を落とし、グッ、パと開く手は確かに記憶の中の自分と比べて一回り以上も小さく見える。

今、考えれば先程の犬も、成人男性でなく伸び盛りを迎える前の少年期の男子と同等の大きさであればその脅威は世間的には少なからず減じるだろう。

「……全然、違和感ないんだが」

しかしそれにしても。立ち上がり、手を振り、軽く跳んだりして確認する五感はまだで古くからこの身体にいたように馴染んでいる。目線の高さや手足のリーチなど、明らかに食い違う筈のイメージがぴたりと嵌まる感覚に、何となく心地悪さを覚える。

「正史での外見ですからな。そのように補正されるのでは？ いちいち違和感に襲われていては先の戦闘で呆気なく敗れてしまう訳ですし」

「まあ、都合がいいからいいんだけど、な」

正史。己が幾度も書き直した序章。今でも容易く記憶から引きずり出せた当時の物語には、確かにそんな描写はなかった筈だ。異世界に來た事に張り切り、鼻息荒く旅路に出発する——そんな構成だったと臆気ではあるが覚えている。

「正史、つてのはアレか。俺が昔に書いた物語の事だよな」

「詳細は存じませんが、この世界の枠組みを作り出したのは紛うことなくカストシ殿かと。世界に満ちるマナの色も波動も貴方が纏う魔力とうり二つですので」

男も否定しない。

自分の書いた物語の世界に迷い込む。それがどうやら事実らしいと、カストシは盛大に溜息を吐き出した。

「もう一つ、確認だ」

ならば。それはそれで、疑問が湧く。

「正史を進む場合、俺の精神も正史通りに改竄されるのか？」

果たして当時の——勇者や異世界などのキーワードに目を輝かせるような——小学生時分のカズトシならともかく、高校大学、社会人と経て良くも悪くも前の世界の常識に染まりきった『高尾和利』はこんなに物分かりの良い、聞き分けのいい人物だっただろうか。

「平気で違う世界に来た事を受け入れて、当たり前みたいに魔物と戦ってさ。しかも首をお前に斬られて、犬には殺されそうになって……そういうのを平然と受け入れてさっさと話を進めようなんて思える程に俺は強くなかった筈なんだよ」

自嘲するカズトシに、口を挟もうとした男は途中でそれを止め、首を振る。分からないのだ、男にも。そんな『設定』は確かに男の知る所ではないだろう、カズトシは力ない笑顔のまま、溜息を漏らす。

「コンビニ前にたむろってる若い子がいるだけで、次のコンビニに目的地変えるくらいだったんだぜ、俺」

絶対の正義に燃えていた少年は、いつしかそんな事なかれ主義者と化した。

かつてなら心躍らせ、奮い立つ場面であろうこの場面。しかし摩耗してしまった本来の『高尾和利』にとってこの状況は次々と起こる異常事態にパニックを起こしても何ら不思議ではないはずだ。

「いい。悪い、ただの愚痴だ」

だというのに、淡々と。

そんな自分を弱い、邪魔と悩みを切り捨て話を進めようとするカズトシの内面。

我ながら勇ましい有り様に、自嘲の笑みも乾き。張り付いたままの笑顔で空を見上げれば、眩しさに手をかざして独りごちる。

「……昔の俺は、随分強靱な主人公にしてたんだなあ」

あるいは、和利自身が若ければまた受け取り方も違ったのだろうか。

とはいえ仕方ない。どうやら蹲り、見ない振り聞かない振りをして過ごす時間をこの世界は許してくれないようだから。青い、突き抜けるような蒼穹の空から視線を外すと、いつの間にか当初のふざけた笑顔を引つ込めた男を見上げる。

「つまり正史が定めた大枠からは逃れられないという所でしょうか」
「多分な。異世界に行く。主人公の外見は金髪で青い眼、魔物を倒す、後は多分騎士団に連れられて町に行く、この辺りは確かに昔そう書いた気がする。この大枠からはみ出ようとすると、具体的に言えば魔物から逃げる、異世界に来た事を認めずパニックになる、そういう事を起こしそうになると正史の修正力が働く、と」

汚れを知らない頃の自分からすれば、そんなリアリティのある主人公はむしろ弱虫意気地なしの烙印を押され、失格となったのだろう。

男の推測に頷くカズトシは苦笑いを浮かべて肩を持ち上げる。

「救いは騎士の所まで行けば時系列があやふやになる所だな」

少年の和利が書いた正史は、完結していない。何度も何十度も書き直した導入部こそ綿密に雁字搦めに固定に近い勢いで書かれている物の、他は当時の和利が妄想した『名場面集』に過ぎない。プロットやテーマなどの単語を知らず、勢い任せに書いた物語は完結される事なく、和利の記憶の片隅に放置されていた。

「では其処までは正史通りに？」

「ああ。アンタだってその方が都合良いだろう？」

故に身も心も縛られた一本道ストーリーを歩むのもあと僅か、騎士たちとの出会いまでを耐えきれば、あとはカズトシの意思に近い心身を取り戻せるのではないか。

カズトシはそこに活路を見いだそうとしていた。

「否定はしませんが、ね。そうすると、正史の大枠が失われるこれから、肉体や精神の補正が外されるかも知れません。お気をつけ下さいますよう」

「ん？ 精神はともかく、肉体もか？」

「自分と体高で互角の獣と腕力勝負で持久戦に持ち込むような肉体的特徴。先のカズトシ殿の話を拝聴し、思い至ったのですが、アレも十分に異常異端の類でしょう」

男の忠告に眉を上げる。確かに、とカズトシは頷く。

考えてみればそれも十分におかしい事態だろう。そうすると、転移してからこの時までカズトシは肉体も心も、補強されて場に臨んでいた事になる。この世界に、そんな補強された心と体なしで放り出される事に恐怖を感じない訳ではないが、理不尽と自分で感じた行動を選び続けるよりはよほどマシだろう。そう自分を納得させて、させてから、果たしてこの心のありようは高尾和利の物なのか、力

ズトシの物なのか、判断に苦しむ。

堂々巡りに陥りそうであった思考を断ち切ったのは、遠く聞こえて来始めた何頭もの馬が駆ける音が風に乗って聞こえてきてから。

「さて、そろそろ私は離れる頃合いのようすな」

つまりは、目の前の男の役目が終わる頃合い。

「ん、お勤めご苦労さん。次にアンタが登場する所まで、辿り着けるように頑張るよ」

言いたい事、確認しておきたい事は尽きないが、どうせ引き留めたとて男をこの場に留まらせる事は不可能だと、カズトシは軽く手を振る。男が騎士たちと出会う正史は描いていないのだから。

「そうですね。これは貴方にしか果たせぬ【役目】。無理矢理魂を此方に連れ込んだ私が言うのもなんですが、武運長久、お祈り申し上げます」

道化のよう大仰に頭を下げる男に「またな」と声を掛けると、男は朗々と吟じ始める。

「<疾く駆けよ、空は我が身の一人舞台>」

魔法の詠唱。

『超高速飛翔呪文』を耳にするカズトシは、ぞわぞわと。この場に相応しく補正された心をもってしても抑えつけられない寒気に襲われる。

若き日の「自分が考えた格好いい呪文」が目の前で大の男に真剣に唱えられている姿に全身、掻き篦りたい衝動をどうにか抑えてい

る内に呪文は完成し、男は天高く舞い上がり、空を翔る。

「おっと」

「うお！？」

その中途。カズトシが見上げている空の上、一筋の光にしか見えぬ速度で跳ぶ男の軌跡と、空を悠然と飛ぶ何かの影が衝突する。男が描く軌跡は一瞬、留まった後、空の向こうへと再び飛翔していき、その一方で墜ちてくる魔物に、カズトシは驚きと、

「えー……」

呆れを両立させた視線で、地響きを立て地面を陥没させた魔物を見下ろす。

もうもうと立ち込める土煙の中、正体を確認すると今日何度目か分からない溜息を漏らす。

「……これも、正史の修正力……か？」

そこには、本来倒すはずだったレッドドラゴンだろう魔物が、赤い鱗を纏った巨大な蜥蜴が腹をぶち抜かれて、昏倒していた。

馬が大地を駆ける足音と共に、微かに騎士団の驚きや狼狽する声が聞こえてくる中、カズトシは頬を引き攣らせて佇んでいた。

第二話（後書き）

お気に入り登録して下さい方がいました、ありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8638y/>

昔中二病、今魔法使い

2011年12月4日17時09分発行